

Views from Orienteering

オリエンテーリングを通して社会を見る

村越 真

View8 朝霧トレラン 2011 実施までの顛末

9月4日、朝霧トレイルランニングレースを運営した。週間天気予報では、週末は台風一過の好天。土曜日の設置ですらルンルン気分のはず。その期待は週末に近づくにつれ裏切られた。さっさと通過するはずの台風12号は時速10kmで、一向に進む気配がない。設置は仕方ない。当日さえ晴れてくれれば・・・その願いも、金曜日には空しいものとなりつつあった。

すでに金曜日には誘導テープの2/3は設置されていたので、土曜日は大量の雨の降った後のコース状況を把握することにエネルギーを投入することができた。気になっていたのは、2カ所。一カ所は朝霧名物の最後の2kmの涸れ川。水量が増えれば増水や濡れによるスリップの危険があった。もう一つは、竜ヶ岳南麓の巻き道。相当の斜面を横切るこの道は、山腹からの崩落などが予想された。通常のみドルが折り返すA沢貯水池での折り返し、後半部分も猪の頭までいかに往路に戻る短縮コース。この時点での次悪の想定が、この短縮コースだった。僕は、午後3時ごろにはその両方を点検して、最終決断の素案を出す予定だったが、涸れ川の状況は気になっていたもので、午前中にセンター所員と一緒にテープ誘導設置しながら状況確認をした。

涸れ川の状況は想定を超えていた。沢に入ってから300mの地点で、すでに股下までつかれる窪地があった。ここは左右に逃げられるとしても、その先は逃げられない。いつもは涸れ川の場合

が、「ここは赤目四十八滝か!？」と思うほど、趣のある「滝」と化していて、シャワークライミングに絶好の光景が続出した。特にひどかったのは139号のアンダーパス。流れが速く、僕らですら足を取られそうだった。3人の一致した意見は、「とっても楽しい。」でも「ここはレースでは使えない。」

午後、もう一つ気になっていた竜ヶ岳巻き道を山下さんと見に行った。同時に、宮内・伊藤には根原の5.6km地点からA沢までのエリアの確認を依頼した。この区間、一カ所深さ1mくらいのみぞ(普段は水なし)を通過することを思い出したからだ。A沢から東海自然歩道の巻き道に向かう箇所にも、沢を通過する部分がある。普段でも水量があるから、竜ヶ岳南麓どころか、おそらくここも渡れないはず。そう思いながら沢まで行ってみると、水量は確かに増えているものの、不安を感じるような状態ではなかった。その後の巻き道に至っては、一部に水の流れがあるものの、深い森に守られ、静かで落ち着いたいい雰囲気のとれイルと化していた。路面も適度に湿っていて心地よい。おそらく森の保水力が高いことと流域が狭いからなのだろう。僕と山下さんはこの部分をカットする実感的な理由を全く見つけることができなかった。むしろ、この区間こそ、明日のレースに使いたいくらいだった。

ただ、この巻き道はところどころ急斜面と岩壁が巻き道に張り出している。雨中のハイキングで落石にあい中学生が死亡した自然体験では、学校側が書

類送検ながら不起訴処分、不服申し立てを通してその却下に至った経緯を知っている僕としては、このエリアを使うことが危険回避義務違反に問われることはないと考えることができたが、常識的にはあり得ないだろうという暫定的な結論に至った。昨年浜名湖で死亡事故を出している県立施設の一つとして、二回目の失敗は許されない、というよりも失敗のリスクを冒すことはできないのだ。

その頃、伊藤から写メが送られてきた。腰まで水につかる宮内の写真と、沢の下流が急流になっている状況だった。腰まで水に使うところはオリジナルルート。その利用はこの時点であり得なくなった。元々東海自然歩道も、出水時はここに迂回ルートが設定してある。一方、急流になっているのは迂回ルートの方だった。しかも、その上流は倒木がストレーナーになっており、いつ崩壊して大出水するかもしれない。この横断はあり得ないというのが宮内の判断。また139号をアンダーパスで通過する牛道も、増水しており、宮内は楽しいけれど、ランナーには不安な状況だろう。

確認からの帰り、涸れ沢の上流部を見たら、見事なほどに水が止まっていて、心が動いた。そこで、麓の涸れ川を再度見に行ったら、こちらはあり得ないくらいに出水で、やはり南部のコースカットは動かしがたいことを確認した。

これらの情報を元に夜17時のミーティングでは、7.1km地点(迂回のため約8km)での折り返しが決まった。ただし、4.1km地点から斜面の脇を抜ける場所は、脇の沢の水量が一定量あり、水は濁っていないものの、さらに増水の可能性はある。ここで通行が不能であれば、レースは最大9kmとなり、この場合は中止だろう。従って、朝6時の中止決定の前に宮内がこの地点を最終確認し、その後もこの地点を注意深く見守ることを決めた。また、もし牛道の増水が激しければ、レースは中止し、この地点は139号を車の通行の支障のない範囲で平面横断し、記録は残すか順位はつけない記録会形式にすることも決めた。コース短縮は間違いないので、そのことと、それに伴いスタート時刻を繰り下げることも決めた。それによって、参加者も6時の決定を待ってから移動できる可能性が増えるし、できた余裕によって危険箇所へ人員を



ここは赤目四十八滝か、奥入瀬溪谷か!？いつもの涸れ川が水量豊かな溪流になってしまった。

手厚くすると同時に、朝の点検も十分行うことができる。

その後も台風情報や天気予報、雨量、警報の出入は連続的にフォローした。警報は中止の自動的条件である暴風雨警報ではなかった。昨日気になっていた4.1kmからの地点についても、朝5:40の宮内情報からはリスクの増大を認めることができなかった。土砂災害警戒情報と洪水警報は出ていたが、それらのリスクのある場所は全てカットしたか、コントロールの範囲内で継続的に見守れている確信が持てた。自然の中の活動は不確定さがあるからおもしろい。その一方で安全は確保しなければならない。そのバランスを取ることが重要だが、特に二度目の失敗が許されない県立施設であることを考えれば、そのぎりぎりの判断に同意してくれたのも、日頃から悪天候も含めたハードなキャンプを主催している20年以上の経験値の賜だろう。もちろん、フィールドでのアドベンチャーに卓越した伊藤・宮内の二人が、的確にコース内のリスクを把握し、正確かつ詳細に伝達してくれたことが、その支えになっていた。

自分とは言えば、確かにレース短縮という得難い経験をさせてもらったけれど、経験値が上がったという実感は乏しい。主要な短縮の要因がリスクの見積もりによるのではなく、腰までの水没やコントロール可能だと思われる土砂の崩落であった点にあるからだ。リスクの実感ではなく、「これ、普通だめでしょ」という常識に多くを依存してしまった。もちろん、ぎりぎりの実感による意志決定は、自然にはなじみのない一般ランナーの走る本大会にはふさわしくないことは承知している。

意志決定のプロセスと、その重要性は、参加者と共有するため、撮影した写真も含めた現状を前日午後にウェブに掲載するとともに、会場にも掲示した。参加者から不平不満が出ることへの不安があれば、意志決定はリスクにシフトする。それはトムラウシなどのツアー遭難を見れば明らかだ。先週インタビューしたガイドさん（自身、いつ死んでもおかしくないようなクライミングをしている）が、「相手の人数が多い時は、最初からリーダーシップをとることが大事なんです」と言った言葉が記憶の片隅にあったのかもしれない。的確な内容の情報を適切な方法で出し、参加者も納得してくれるはずだという主催者の確信は、安全な意志決定には重要なファクターになる。もちろん、ネガティブな印象だけを提示するのではなく、若干のウィットも込めて。

レース実施の結果を参加者の方々は

どのように受け止めただろうか？興味あるところだ。ざっと見たアンケートでは、悪天候の中、危険もなくしてレースを実施したことは評価されているようだった。コースに対する評価は低い、大会全体に対する評価はまずまずだった。ニューハレの芥田さんからは、「ただ中止とかやります、っていうのでなくて、こうこうこういう状況だからこうしました、っていうのがさすがですね」というお褒めの言葉をいただいた。

きわどい意志決定を要求されれば、気持ちはポジティブにもネガティブにも揺れ動く。その後もあれこれと考え、また考えさせられる情報が入ってくる。僕は根原の崩落を「コントロールの範囲内」と書いたが、その時、僕の頭の中には500人という大勢の集団をコントロールするというイメージはなかった。結果として宮内の状況判断にゆだねたのだから、チーム全体の意志決定としては間違っていなかったわけだが、自分としては大きな判断ミスにつながる思考様式だった。

危機管理的な仕事に携わるあるランナーの方は、基本的には主催者の立場に共感しながらも、冷静に10の中止すべき理由を書き送ってくれた。そのいくつは、当然私たちも検討に付していたものだが「コース短縮により、本来のコースの魅力はほとんど失っており、単に「走らせる」だけのレースとなった。」「主催者が開催と言えば、参加者は自己判断を放棄するし、さらに集団となれば不安が消え、個人による状況判断は期待できない。」といった視点を提示されると、確かに実施は主催者の自己満足だったのかもしれないと反省した。

事故報道の現状や、過失がなくても

世論がどう振れるか、またそれがトレラン界やより大きな枠組みにおよぶ影響、報道各社が災害時にはセンセーショナルな「事故」や「被害」を探している。といった意見はとても参考になった。僕自身は、それと戦いたいという気持ちはあるが、県立施設ではなく、自分で全ての責任を取れる立場としてやるべき冒険だろう。

江川紹子が、オウム裁判の弁護人神山啓史にインタビューした時に、彼は「困った裁判官というのは揺れないんですよ」と言った。その一言を、せめてもの慰めにしよう。

View 9 二つの講習会

登山関係の研究費を獲得したので、9月上旬にイギリスの国立登山研修所に出かけた。主目的はリスク管理だが、せっかくだからナビゲーションのコースも自分で受講することにした。実践や研究を通して、原理的な視点からナビゲーションを体系化してきたが、同時に環境に応じてナビゲーションの具体的なスキルが異なること、それに適した適切な道具も異なることに気づいてきた。たとえば、イギリスで出版されたナビゲーションのテキストでは、特徴物としてしばしば「石垣」が登場する。産業革命に前後して、羊を放牧するために草原の丘が囲い込まれたのは、僕らにとっては歴史的事実だが、現在のイギリスでは、この時以後作られた囲い込みのための石垣が今でも残り、大縮尺の地図には記載されている。「これを使い」というのだ。諸外国でナビゲーションがどのように実践されているかを知り、原理をその実践と摺り合わせることは、いつか、英語で自分のナビゲーションスキルの体系をテキストにしてみたいと考え



大雨洪水警報の中で短縮実施された朝霧トレラン（右端は招待選手の柳下大）。自然の中で活動する時には、常にリスクへの警戒心と同時に、リスクを引き受ける覚悟が必要だ。



相当な悪天候の中でも無頓着に実施される講習。七つの海を支配した大英帝国の名残を感じた。

る自分にとっては不可欠のステップだ。

コースの初日。室内での簡単なレクチャーの後、10:00には屋外にスタート。一応このコースは、基本的なナビゲーションができることが参加条件なので、参加しているのも、ツアーにハイカーを連れて行く機会がある人とかマウンテンマラソンに出ているからといった参加者のみ5名。インストラクターは24歳のGuy(歳は後で知ることになる)。屋外講習がスタートしていきなり雨。それも結構強い。こういう状態での西欧人の無頓着さにはかなわない。さくっと、レインウェアを着て、当たり前のように講習を続け、受ける。

講習の最大の収穫は、学ぶべきことが一つしかなかった点だ。現在地を確認し、目標を示して、その間に見える特徴を参加者に言わせる。さらにそれを確認しながら歩くとともに、頼れる記号とそうでない記号について、質問ベースで確認する。続いて、歩測の練習。それが終わると、参加者の一人に先導させて、他のメンバーはリロケートの練習。講習内容の基本的構成やその順序など、何一つ目新しいものがなく、僕が彼に入れ替わったとしても全く同じことをしただろう。

唯一学ぶべきだと感じたのは、常に質問ベースで講習が進められている点だ。参加者が基本的なナビゲーションスキルを持っており、人数が限られていることが前提になっているのも大きな理由だろう。これから屋外講習の準備をして集合という時にも、「じゃあ、持っていくものは？」ここで、また参加者から「日焼け止め」(その日は終日曇りまたは雨の予報)という絶妙のジョークが出る。参加者も、とにか

く回答する。文化的な背景にもよるの

だろう。ナビゲーションコースの二日目の「総合実習」は、前日のルートプランから始まっている。まずは、明日の目的は何?から参加者に質問を投げかける。「ナビゲーション」と「楽しみ」それぞれに下位項目を挙げる。その後丁寧なコースプランの作成となる。コースをいくつかのセグメントに区切って、それぞれの距離、標高差を参加者が確認する。またスミスのルール(等高線10mあたり1/2を足す)を使って、所要時間を見積もる。平面距離に対しては1時間あたり4kmだ。これに休憩時間を適当に見積もってコースタイムを計算する。どうせナビゲーション講習なのだから、あまり精緻にやっ

も意味ないと思うのだが、そこをきっちりやるシステムティックさは、イギリスならではかもしれない。こうして見積もった時間は7時間。少し休憩を取りすぎだね、ということになった。

翌日は9:45より移動開始。一人一人に行き先を指示し、ナビゲーションの戦略(僕の言葉でいけばルートプランだ)を話した上で、ナビゲーションさせる。他の4人はリロケートする。意外とみんなリロケーションには時間がかかっている。途中からは余裕で、できの悪い女性に解説したりして、半分アシスタントのようだった。

リロケートは基本的には瞬殺だったが、一回だけミスをした。ここは確信がなかったのだが、彼の回答とは違っていた。結局誰かが持っていたGPSで確認したのだが、それで彼が大喜びしたところを見ると、彼も自信がなかったのだろう。

帰国直後に山岳ガイド協会から頼まれていたツアー登山での読図講習が行われるはずだった。ところがこちらの方は、9月10月の2回とも、最低催行人数に達しないため、流れた。読図講習をやれば、大して広報もしないのにはほぼ定員。商業ベースのものではないつも抽選という経験をしている僕には信じられない状態だった。きっと催行していたのがツアー登山会社だったことも災いしているのだろう。ツアー登山をする人は、リスクと面倒を避ける。もっともナビゲーション講習とは相性の悪い人たちだったのかもしれない。こういう会社でのツアーのナビゲーション講習の定員が埋まる日が、目指すべき登山界の姿かもしれない。

(村越 真)



講習は、リロケートを含めて質問ベースで実施される。皆ある程度の力量の持ち主だけに、講習も多様かつチャレンジングで楽しい。